



### お魚クイズ

この原稿を書いている12月現在、新型コロナ第3波の真っ只中にある。今年はコロナウイルス感染症のために日々の生活スタイルが大きく変わってしまった。大学の講義や学会が遠隔で行われるようになり、仕事の仕方が変わっただけでなく、休日の過ごし方も少しずつ変わってきている。私自身は週末に自然に接する機会が増えたように思う。私は地方都市で単身赴任をしていて、第1波の押し寄せた今春以降は家族のいる東京に帰ることができず、長年染み付いた習性で、“することがなければとりあえず研究室に行ってみる”というような週末を送っていた。そんな中、職場の友人が三密を避けて釣りにでも行こうと誘ってくれた。子供の頃から釣りが好きだった私は、海がすぐ目と鼻の先にある単身赴任先にも釣具一式を持って行っていたので、二つ返事でついていくことにした。その釣行では仕掛けを投げ入れるごとに面白いようにシロギスが釣れてきた。シロギスは自身が美しく海の女王とも呼ばれ、天ぷらやお刺身で非常に美味しいので、釣り人には人気の魚である。家に持ち帰り、皿に並べて携帯で写真を撮り、小学2年生の息子に送ってみた。するとすぐに「何という魚？」と返信が来た。これをきっかけに息子との遠隔お魚クイズが始まった。私が釣った魚の写真を送り、息子が図鑑で調べて答えを当てる、という具合に。それから数回の釣行では、釣れる魚の種類もメゴチ、マハゼ、メジナ、カサゴ、クサフグ、,、と順調に増えていき、こちらの問題作りにも困らなかった。ところが、4,5回目の釣行にもなる

ともう新しい種類の魚は全く釣れなくなり、友人がシロギスを楽しそうに釣る傍で、いろいろと仕掛けを替えて、何か他の魚を釣ることに集中することになってしまった。さて、今年の釣り納めとなった11月の週末に、体長が12,3センチメートル程の赤茶色の奇妙な魚が釣れた。あごから黄色い2本の髭の生えた可愛い顔をしている。私自身も初めて釣った魚であったものの、図鑑ではなんとなく見覚えがあった。釣れたのは“オジサン”という名前の魚の子供(幼魚)だった。髭を生やしたおじさんに見えることからその名前が付いたらしい。なんと安易な命名法かと突っ込みたくなるが、面白いことに、英語名もやはりその髭から名前が付けられている。ただ、欧米の人がその髭から連想したのは“おじさん”ではなく“山羊 (goatfish)”だったようだ。その“オジサン”のおじさん(成魚)は30センチメートル程にもなり、とても美味しく、沖縄や九州では高級魚として取引されているらしい。さて、釣り場で撮った愛嬌のあるヒゲ面のアップを東京の息子に送ってみた。するとすぐに「オジサンのコドモ！」と返って来た。なかなか手強い。私が一向に新しい魚を釣って来ない間にすでに魚図鑑を丸々覚えてしまったようだ。

今年、息子へ出した魚クイズはちょうど20題になった。その中でとても印象に残っている魚があるので、ここでお魚クイズを出したいと思います。その魚は15センチメートルほどの茶褐色、細身で口が大きく、こまかい鋭い歯を持っている。口に掛かった釣り針を外そうとすると、その大きな口で指に噛み付いてくる。驚いたことに口の中が本当にきれいな、自然のものとは思えない青色蛍光マーカーの色をしている。外見は岩場や海藻の間に溶け込むような保護色なのに、どうして口の中だけがこんな色に進化したのだろうか？ 本当に不思議でならない。

さてなんという魚でしょう？

(答えはア□ハ□。ヒント：□にはWhy?が入る)

(T)